

(様式「2」)

論文の内容の要旨

論文題目

ジェンダーの比較映画史——「国家の物語」から「ディアスポラの物語」へ

氏名 川口恵子

本論文の主たる目的は、映画における^{ネーション}国家／^{国民}国民（以下、ネーションと記す）とジェンダーの関係を、相反するベクトルから考察することである。すなわち、前半部のナショナル・シネマ論（第一部、第二部）は、複数の異なる国のナショナル・シネマ（以下、NCと略）の事例分析を通して、ネーションの危機に登場する映画が、いかにジェンダーを操作することでネーション神話を再構築するか、その過程を明らかにする方向性を持つ。逆に、後半部のインディペンデント・トランスナショナル・シネマ論（第三部、第四部）は、移動体験ゆえにトランスナショナルなアイデンティティを持ち、なおかつ映画、ネーション、ジェンダーの关系到意識的な女性映画作家が、いかに、新たな女性表象をとおして、ネーション神話を解体し、「もうひとつの場所」を映画的時間空間に創造するかを探求する。

本論文の議論を通して、最終的に浮かび上がってくるのは、資本主義の産物であるがゆえに西欧先進諸国で誕生した映画が、その初期から領有してきた「第三世界の女」が、表象される側から、表象する側へと変化し、ネーションとジェンダーの関係を問題化してゆく世界映画史の地殻変動である。西洋中心的な世界映画史の内部に、こうしたダイナミックな動きを見出すことによって、本論文の企図するところは、高度資本主義と^{グローバル化}地球化の時代に、肥大化した影響力を行使するハリウッド映画に代表される第一世界の主流映画の論理からも、^{グローバル化}地球化の影で再び第三世界の国々に飛び火しつつあるナショナリズムの論理からも解放された、もう一つの対抗空間を作り出す想像／創造行為に参画することである。映画作品は、分析者が自らのアイデンティティをかけて作品世界の読解行為を行う時のみ、「意味とアイデンティティをめぐる、相互テクスト的、^{クロスカルチュラル}異文化間的、かつ翻訳をめぐる闘

いの場」(アルジュン・アパデュライ)に変貌を遂げる。その意味で、本論文で行う映画の読解行為は、新たな「闘いの場」^{サイト}となるだろう。

序論では、まず、先行研究に基づき、NC の概念と記述法を整理する。ネイションが神話であり、「不安定な概念」であるがゆえに、転覆可能性を孕むという前提を立脚点とし、NC が再構築したネイションが虚構にすぎないことを示すことが、NC 論の究極の目標である。次に、先行研究に基づき、インディペンデント・トランスナショナル・シネマ (以下、ITC と略)の定義と現代世界における意義を示し、ジェンダーの観点を取り入れる必要性を提起する。最後に、分析対象、対象を選択した理由、分析手続きを提示する。

第一部では、1930 年代フランス植民地映画を取り上げる。最初に、無声からトーキーに至る映画史を縦軸とし、ハリウッド映画との競合を横軸にすえた世界映画史の座標軸に、植民地映画を再配置し、植民地映画の系譜を辿る。次に、隣国ドイツからの資本・人の流入により、フランス映画のアイデンティティが一時的に危機に陥った 1930 年代の諸相に焦点をあて、植民地映画が NC として成立する過程を辿る。その上で、1930 年代フランス植民地映画の代表的作品『望郷』を、音 (台詞・歌・音楽)、空間表象、ジェンダーの観点から分析し、それらの要因が相互に関連しつつ、危機に瀕した本国のナショナル・アイデンティティを再構築する過程を明らかにする。

第二部では、フランスの植民地支配下にあつて、長く自国映画の製作手段を持ちえなかったベトナムの NC、革命映画を取り上げる。まず、フランス、アメリカの帝国主義的眼差しの対象としてのベトナムから記述を始め、仏領インドシナ時代の映画的植民地状態を概観し、国民国家創出 (=革命) の手段として誕生したベトナム革命映画の成立過程と特質を探る。次に、ベトナム初の劇映画『分かち難き川の流れ』、ベトナム戦争の重要な転換期に製作された劇映画『トゥー・ハウ』、ベトナム戦争末期に製作された『十七度線 昼と夜』を取り上げ、空間表象、時間表象、ジェンダーの観点から分析する。映画内で国民国家創出の動きを作り出す重要な基盤となっているのは、南北分断という政治的状況をジェンダー化した空間表象である。国家の不可分性を、一組の夫妻 (「北の夫」と「南の妻」) の比喩を用いて提示する力学には、ベトナム民主共和国 (北ベトナム) を支える革命思想と父権主義の結びつきが窺われる。現実には未だ遂行されざる革命を未来完了形として提示する映画内で重要な機能を果たすのは、空間表象と連動した時間表象 (「夜」から「昼」への移行) だが、そこにも、ジェンダーが重要な装置として関与する。ベトナム戦争当時、ベトナムでは民族解放と女性解放が同時に達成されつつあるというイメージが世界に流布したが、革命映画の分析をとおして、革命 (=民族解放) という「国家の物語」のために、ジェンダーが装置として動員されたことが明らかとなった。

第三部では、仏領インドシナに生まれ育ち、十八歳で本国フランスに移動したマルグリット・デュラスの映画『インディア・ソング』を ITC の事例として取り上げる。この作品の製作動機について、従来の先行研究は、デュラスにとって重要な女性像、アンヌ＝マリー・ストレッテル (以下、AMS と略) を破壊するために映画を製作したというデュラスの

言葉を無批判に受容してきた。しかし、本稿は、そもそもなぜ、繰り返して書くことの対象であり、書く事の源泉ですらあった女性像を破壊する必要があったのか、より根源的問いの下に、ベトナム戦争終結と同時期に製作された同作品を、デュラスの政治性とアイデンティティを視野に入れつつ分析する。鍵となるのは、映像と声に分裂した AMS と女乞食という二人の女性表象である。AMS を画面外から脅かしつつ、その死に際し、哀悼と慰謝の歌声を響かせる女乞食表象については、アジアを舞台とするデュラスの文学・演劇作品との相互テクスト性を参照しつつ、分析する。浮かび上がってくるのは、反植民地主義という政治的立場と、白人植民ブルジョワ社会への潜在的な欲望の狭間で引き裂かれたデュラスの深いアンヴィヴァレンツである。最後に、画面外から響く複数の「身体を持たぬ」女性の声が、観客をいかなる時空間に導くかを探求する。

第四部では、ベトナムに生まれ育ち、十七歳でサイゴンからアメリカに脱したトリン・T・ミンハの映画作品『姓はヴェト、名はナム』を ITC の事例として取り上げる。従来の先行研究が指摘しなかったことだが、本稿は、同作品を、アンダーソンの国民国家論に対する、ディアスポラの女性映画作家からの応答として位置づける所から出発する。考察手順としては、まず、トリンの政治的映画製作における声の戦略的意義を確認し、『姓はヴェト、名はナム』の政治的意義を再考する。次に、作品内で最も革新的な「ベトナム女性の声」の構築過程を、原テクストに遡って考察する。ニューカレドニア生まれのベトナム系二世の女性が、ベトナム戦争直後のベトナムに渡り、女性たちの言葉を採取し、パリで出版したフランス語の原テクスト『ベトナム、一つの民、複数の声』は、従来の英語圏の先行研究が全く参照してないものである。本稿では同原テクストを読解することで、原テクストから映画化に至るプロセスを、ディアスポラの女性たちのネットワークが声を翻訳する過程として読み解く。その上で、『姓はヴェト、名はナム』を、反植民地主義闘争の中で「国家の物語」として称揚されたベトナムの国民的叙事詩『金雲翹』を、国家の側から奪取し、「ディアスポラの物語」として語り直す映画的翻案として再解釈する。最後に、トリン作品を、亡命映画作家（ジョナス・メカス、アンドレイ・タルコフスキー）の作品と比較し、その特質を探る。その上で、国家と国家の狭間に生きるトリンが、声の中に織り込んだ故国表象を「声の中の〈ホームランド〉」として読み解く。折り重ねられた声の襞の中に表象されたそれは、同じ離散者の観客が映画を見る行為によってのみ見出される、映画という現実には存在しない時空間にのみ可能な、ディアスポラの〈ホームランド〉である。

結論部では、まず、前半部の NC 分析を通して見出した、帝国及び帝国主義との関わりという新たな観点から NC を再考する。そして、「帝国主義のもつれあった遺産」(E.サイード)として、フランス植民地映画、ベトナム革命映画を見る視点を提起する。次に、序論で立てた問いの答えを、各 NC について記す。また、第一部、第二部で行った各 NC 成立過程の記述を反省的に振り返り、NC を本質化・自然化することなく、映画における「国家／国民的なるもの」を問題化するものとして、NC を捉えるアプローチを提起する。さらに、後半部の ITC 論を振り返り、NC に対して対抗的な価値を作り出す映画として各

ITC を再評価する。NC におけるジェンダーを利用したネイション神話再構築のあり様をつき崩す作品として、デュラスとトリンの映画を再評価し、ジェンダーが、いかに、新たな映画とネイションの関係を示すことができるかを示す。最後に、ジェンダーの観点から本論文全体を振り返り、「ジェンダーの比較映画史」と名づける根拠を示す。